

## 児童文学とは何かというとてもむずかしい問題

川端 有子

子どもが読む本のことを児童文学という、そういえば簡単ですが、実はこの言葉がよびおこすイメージは、ひとによって様々で、しかもずいぶん曖昧です。そもそも、子どもが読む本でありつつ、書くのも売り買いするのも評価するのもおとなである、という児童文学の特殊性と、その定義の難しさについて考えてみたいと思います。

### 1 名称の混乱 よくある思い込み 絵本、童話、ファンタジー、子どもに夢を与える

### 2 子どもとは何か

### 3 文学とは何か

### 4 子ども＋文学＋見えないおとな

### 5 戦後日本における『子どもと文学』の影響力

しかし・・・

・子どもの本にイデオロギーは不必要であり、有害ですらあると唱えたこの本が最も推奨している本が『ちびくろさんぼ』(*The story of Little Black Sambo*, 1899) であるという皮肉

・『ちいさいおうち』(*The little house*, 1942) 『クマのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*, 1926) のイデオロギー性

### 6 典型的な児童文学を精読すると

『不思議の国のアリス』(*Alice's adventures in Wonderland*, 1865)

『ピーター・パン』(*Peter and Wendy*, 1911)

『ピーター・ラビットのおはなし』(*The tale of Peter Rabbit*, 1902)

### 7 子ども時代の拡大と児童文学のボーダーレス現象

提言：とりあえず「児童文学」とひとくくりにしてしまわないで、中身を見てみない？  
共読者たるおとなにできることは？